

「第30回住まいのリフォームコンクール」総評

本年も600を超える多くの作品が応募され、素晴らしい作品にお目にかかれたことにまず感謝したい。全体にリフォームの広がりを感じる作品が寄せられている。数年前から賃貸住宅の事業性を視野に入れた審査を組み入れてきたが、本年はさらに枠が広がった感がある。今年は審査要項に新たに「プロセス評価」を加えた。これに応じた作品もあった。プロセスにおける具実的な問題解決・技術内容（たとえばマンション改修における管理組合との折衝プロセス、設備配管の更新プロセス、戸建てにおける年次的な改修計画、これらにおいて生じるストーリー性・実現上のドラマなど）を期待したものである。

戸建てとマンションの応募数の比は、大凡3対1である。戸建て住宅においては、昨年は80年超の古い建物が多かった（15%）が、今年は大分異なり9%であった。戸建ての平均築年数は38年である。マンション系の築年数の分布は、30～39年が28%、20～29年が29%、10～19年が30%で、平均築年数は24年である。

また、中古購入リフォームが昨年から増えてきている。戸建て34件、マンション45件、合計79件（13%）である。また親族の財産継承リフォームが戸建て31件、マンション10件、合計41件（7%）に上っている。戸建てとマンションという違いを越えて、賃貸・分譲、大規模・小規模、エンドユーザー・ミドルユーザー、住宅・非住宅といったさまざまな枠の中で中古建物が流通している様子が窺えた。取得者も高齢者から若者、一人暮らしからディンクス、親子二世帯と、以前とは比べ物にはならないほど自由な住み替えがなされている。

入賞作品には、東京や大阪など都市部の作品が少なく、建築設計事務所の関わったものが多いという結果になった。これは、地方が力を付けてきたこと、作品にかかる設計事務所のエネルギーが大きいことなどの表れであろう。一般の作品は、耐震・性能向上・バリアフリーなども謳っていて、標準以上のレベルまで達してはいるものの、入賞に至るには今一步その先に突き抜けるものが必要だと感じた。その原因は、要求も解答もある程度共通化してきているとか、情報量が多く早い大都市圏では、施主のおかれた環境や考えることが似てきているという事情なのかもしれない。リフォームがある程度成熟した段階になっているともいえる。

昨年度の講評でも、中程度の性能のことを述べたが、部分性能向上や中程度の性能は新築に近く、リフォームならではの特性であり、全体の一律的な向上よりもはるかに難しい。施主は数値的な判断や客観的な評価ではなく、出来上がりの姿や空間を使ってみての評価となる。したがって全体のバランスをどう取るかがリフォーム計画の要であり、作る側は経験に裏打ちされた「抑える判断」が必要になる。これはリフォームの経験や失敗を多く重ね、学び取った者でないとなかなかうまくいかない。審査評において「バランスのよい」という場合は、このような事柄を指していることが多い。つまり、「間取り替え」や「明るく広く」といった当たり前の要望がまず実現されていて、性能向上はそれに付随して必要な範囲が組み込まれる。性能向上が先にあるわけではない。プランとデザインと性能とコストとの間の葛藤・調整がどれだけされたかは作品に現れる。そこを無難にまとめている作品が目立った。結果としてそうした作品は上位に残りにくいことになる。

特別賞の作品は、いずれもこうした面での大きな努力と独自の工夫が見られ、実現した形も力強く美しいものである。詳しくは各作品の講評をお読み頂きたい。

本コンクールも30回目の節目を迎えたが、この間のリフォームを取り巻く環境の変化は凄まじいものがある。関係者の暖かい御支援と努力なくしては、続けることはできなかったものである。この場を借りて改めて感謝を申し上げますとともに、来年以降にも大きな期待を寄せるものである。

第30回住まいのリフォームコンクール審査委員会
委員長 上杉 啓



審査風景